文化財のしおり

大洗町

磯節

（大洗の漁師たちに昔から唄い継がれてきた民謡で日本の三大民謡の一つといわれている）

磯で名所は大洗さまよ　松が見えますほのぼのと
三十五反の帆をまきあげて　行くよ仙臺石の巻
水戸をはなれて東へ三里　波の花ちる大洗
色は真黒でも釣竿もてば　沖じゃ鰹のいろ男
山で赤いのはつつじに椿　咲いてからまる藤の花
沖で鰹のせのたつ時は　四寸あつみの櫓がしなる
沖の鴎に潮どき聞けば　わたし立つとり波にきけ
沖の暗いのに笘とれ笘を　笘は濡れとま笘とれぬ
原山並木が何こわかろう　ときにゃ三途の川も越す
沖に見ゆるは大かめ磯よ　鶴も舞いくる真帆片帆
荒い波風やさしくうけて　心うごかぬ沖の石
磯で曲松湊で女松　中の祝町男松
ゆらりゆらりと寄せては返す　波のせにのる秋の月
潮はみちくる思いはつのる　千鳥ばかりに泣かしゃせぬ
磯は出船の唄から覚めて　松にあけゆく大洗

文化財愛護シンボルマーク

このしおりは、町の文化財を知り、理解を深めていただくためにつくりました。これによって、さらにわが町を知り、誇りをもち、郷土を愛する心を持っていただければ幸いです。

また、町外の方には、このしおりによって、文化財の面からも大洗町を知っていただくことをねがっています。

町の花・木・鳥

（つつじ）

（松）

（かもめ）

大洗町教育委員会
大洗町文化財保護審議会　監修
〒311-1301 茨城県東茨城郡大洗町磯浜町6881-88
TEL 029－267－0230
FAX 029－267－1051

〈発行〉平成13年3月31日

【大洗町史資料集】

大洗町史（通史編）及び追録
第１集　大洗町の小字地名集
第２集　守山藩史料集（上）
第３集　大洗町の漁業関係史料集
第４集　大洗町の海と生き物
第５集　難波船の記録（上）
第６集　難波船の記録（下）
第７集　守山藩史料集（下）

大洗の半切り（たらい船）漁

●郷土歴史講演録

明治維新に想う　宮田　正彦 先生述
藤田東湖と志士たち　杉崎　　仁 先生述
水戸と蝦夷　仲田　昭一 先生述

大洗町 文化財マップ

ひたちなか市

水戸市

渡辺竹楽房の像
厳船の夕照⑨
者楽亭跡の碑
①流れの像
天妃神社
願入寺①
刀万助堂
⑩祝町向洲台場跡
アクアワールド（大洗水族館）
祝町小学校
⑲織姫塚
大洗町斎場
眞端の橋の碑⑫
上の山古墳跡碑
②幕末と明治の博物館
藤田東湖の像⑪
護国寺
第一中学校
磯浜小学校
④車塚古墳
⑥西福寺
日下ヶ塚古墳⑤
金刀比羅神社
大洗駅
須賀神社
磯浜海防陣屋跡
千手観音
大洗町消防署
大洗町役場
⑬勘十堀
道祖神社
⑳孫左ェ門の杉
大洗文化センター
水戸警察署大洗地区交番（中央公民館）
大洗郵便局
ゆっくら健康館
大洗マリンタワー
大洗町魚市場
大貫小学校
富士浅間神社
わくわく子供科学館
県立大洗高等学校
大貫池
西光院⑦⑧
諏訪神社
お葉付イチョウ
金龍泉
八幡神社
大洗サンビーチ
茨城百景の碑
大関五郎の碑
南中学校
夏海小学校
豊姫稲荷
松川陣屋跡
神明宮
大貫橋
涸沼川橋
涸沼橋

子の日ヶ原の碑⑮
⑭山村暮鳥の碑
三島中洲の詩碑⑯
⑰磯節発祥の地の碑
大洗観光協会
虚子三代句碑
大洗磯前神社③
清良神社
大洗海洋博物館
⑱ボードレールの碑
神磯鳥居（表紙写真）
与利幾神社
大鳥居

凡　例

①～⑱	指定文化財を所有する神社・寺院・博物館等、及び碑文等で写真掲載したもの
○	文化財関係神社・寺院・碑文等
㊍	学校
・	その他の機関

1:25,000

0　200　1,000　2,000m

①願入寺

木造 阿弥陀如来立像（県指定文化財）

原始真宗願入寺本尊。願入寺開基如信上人（親鸞聖人嫡孫、浄土真宗第２祖）以来伝承。二指で輪をつくり右手を上に同じく左手を下に向け真宗において法便法身尊像といわれる立像である。寄木造り　像高79cm　仏師春日作。鎌倉時代後期の作。

香合（県指定文化財）

（左）．堆朱、獅子香合、親鸞聖人が９歳で得度のおり、慈円僧上、後の天台座主鎮和尚より拝領したもの。
（右）．唐草模様、如信上人愛用のもの。
いずれも鎌倉時代の作。

朱漆塗蔦葛模様椀（県指定文化財）

東本願寺13世宣如上人（本願寺が東西に分かれてから２代目）の愛用五つ重ねの椀。安土桃山時代の作。

親鸞聖人画像（県指定文化財）

絹本着色。親鸞聖人84歳の肖像、浄土真宗２万５千寺の所有する絵像はほとんどが右向きである。
正面向きの絵像（真向きの御影）でしかも古いものは願入寺所蔵の他に数点といわれている。凡夫が救われる道は念仏しかないと強い姿勢を示している。室町時代初期のもの。

唯信鈔断片（県指定文化財）

親鸞聖人真筆の唯信鈔の一部で、親鸞聖人の兄弟子聖覚法師の法語の解説書を親鸞聖人は好んで弟子（同朋）達に書写し与えた。
そのうちの一片である。鎌倉時代のもの。

蓮如筆 消息大根田御坊宛（県指定文化財）

大根田の御坊とは、願入寺８世如慶上人のことで、願入寺は、如信上人開基以来230年にわたり奥州大網の地にあったが、文安３年（1446）本堂を戦火により焼失。戦乱を避けて大根田村（現、那珂郡緒川村）へ移り、寺宇を構えていたとき、蓮如上人（本願寺８世）より遣わされた書簡。室町時代のもの。

願入寺山門（町指定文化財）

尾張家菩提寺の山門であったと伝えられ、大正年間に現在地に移建した。
昭和47年末大修理を行った。
様式は薬医門（本柱の後方に控柱２本を建て、切妻屋根をかけた門）である。小さいながらも重厚さが特徴。

二十四輩牒（町指定文化財）

元慶元年（1344）如信上人の33回忌を奥州白河大網願入寺に於いて行ったとき、本願入寺第３世覚如上人と願入寺３世空如上人その他高弟によって定められた二十四輩の牒の原本。（如信上人をふくむ24人の高弟の名簿）

尾形光琳筆 襖絵（町指定文化財）

もと銀襖に36枚張りで仕立ててあったが、火災にあい24枚となった。
水にぬれてしまったので画帳として保存したものである。
尾形光琳は、元禄時代の代表的な日本画家。

如信上人座像（町指定文化財）

巌船山願入寺開山第１世如信上人の御影を義公が自ら木造として刻し、元禄13年（1700）願入寺に寄進したものである。
江戸時代前期の作。

②幕末と明治の博物館

扇散蒔絵書棚（県指定文化財）

高さ91cm、幅98cm、奥行き42cm。
日本漆工会製作、明治時代の画人22人、蒔絵師15人による合作である。明治29年に作られた。
黒漆地に扇面を散らし、扇面おのおのに古画を蒔絵し、四脚には菊花文の金具を付ける。各扇面の変化は観て楽しく、全体にすっきりとした品の高さをみせている。

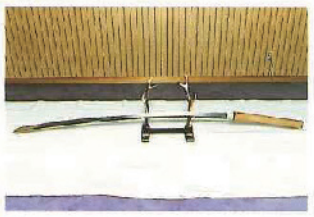
短刀（県指定文化財）

長さ25.4cm。平造り内反り。
茎は張袖形。鍛えは小板目肌よく詰み、地景まじり。
鎌倉時代中期の短刀作者として有名な新藤五国光晩年の作とみられている。

③大洗磯前神社

大洗磯前神社拝殿・本殿（県指定文化財）

本殿は１間社流造り茅葺、拝殿は桁行き５間、梁間２間、１間向拝付入母屋造。（千鳥破風向拝部軒唐破風付）
元禄３年（1690）に水戸２代藩主徳川光圀（義公）が社殿造営の工を起し、次いで３代藩主綱條（粛公）により、本殿・拝殿・神門の建造を終え、享保15年（1730）に現在地に遷座。



太刀（県指定文化財）

長さ４尺９寸（約1.47m）・反り１寸（約３cm）・目くぎ穴２個。
銘文（表）水戸住藤原近則、（裏）嘉永五壬子二月吉日。
作者が東国の総鎮護として信仰厚き大洗磯前神社の御神宝として奉献したものである。

随神門（町指定文化財）

享保15年（1730）粛公が造営、以来代々藩主が手を加え、更に明治・昭和期に大修理を行い現在に至る。

④車塚

車塚（県指定文化財）

標高約35m　独立丘陵上に位置している。
規模は、直径95m、高さ13mの段を有する茨城県内では最大の円墳である。
墳丘裾部付近に巨大の葺石が認められる。
築造年代は、５世紀末ごろと推定される。

⑤日下ヶ塚

日下ヶ塚（鏡塚）（県指定文化財）

この古墳は、復元全長105m、後円部径約65m、後円最頂部高さ12mを有する前方後円墳である。
茨城県内における古墳の中では、規模、副葬品ともに他を圧している。
５世紀前半の築造とみられる。

⑥西福寺

木造 阿弥陀如来座像（県指定文化財）

天台宗西福寺本尊。９種類ある阿弥陀如来の型式の中の「上品上生」の形をしている。
体内に三体の胎内仏（仏像の体内に納められた小形の仏像）が納められている。
寄木造り　像高89.1cm

木造 阿弥陀如来座像（県指定文化財　胎内仏）

寄木造り　像高19.6cm
室町時代の作

木造 観世音菩薩立像（県指定文化財　胎内仏）

寄木造り　像高20.2cm
鎌倉時代の作

木造 勢至菩薩立像（県指定文化財　胎内仏）

寄木造り　像高22.3cm
鎌倉時代の作

⑦西光院

木造 阿弥陀如来立像（県指定文化財）

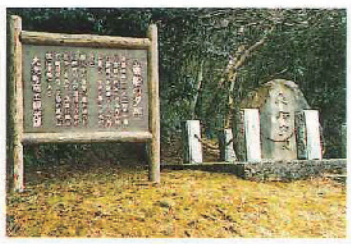
真言宗西光院本尊。右手を上に左手を下に向け、それぞれ二指を捻じた印を結んでいる。
上品上生印　西方極楽浄土の主尊で無量寿仏、無量光仏ともよばれ、永遠を救済する如来である。
檜作り　像高166cm　鎌倉時代末期の作。

絹本著色 金剛界大日如来画像（県指定文化財）

この如来画像は、胸の前で左の拳の人差指を右の拳で握る「智拳印」を結んでいる。宝蓮華の上に両足を組み両足裏を上向きにして坐る結跏趺坐（けっかふざ）という坐り方をしている。鎌倉時代の作。

⑧お葉付イチョウ（県指定文化財）

樹高24m　幹囲（地上1.5m）4.40m　樹齢約400年
生長した葉のへりに「胞子のう」という小さな実ができることから、この名がある。たいへん貴重なものとされている。



⑨巌船の夕照

水戸藩主徳川斉昭(烈公)が水戸八景のひとつとして選定した。願入寺のうしろにあたり眼下に那珂川と涸沼川が合流し、はるかに筑波山を望む景勝地である。天保5年「巌船夕照」と自筆し寒水石の碑を建てた。烈公の歌に「筑波山あなたは暮れて岩船に日影そ残る岸のもみち葉」がある。

⑩祝町向洲台場跡

異国の船がしきりに大洗沖に出没する幕末の文久3年(1863)海防のため烈公の遺志を継ぎ築造された。

コの字形に土塁を築き、その内側に海に向けて大砲を据えた。現在砂防林として松林になっているが、一部の欠損を除き形状がよく保存されている。

⑪藤田東湖の像

水戸学をひろめ、明治維新完遂の基礎をつくった水戸藩の先覚者。この銅像は、本町出身の飛田東山寄付。本町出身の桜井萃晩とその師匠長谷川栄が昭和16年11月製作。磯浜小学校に建立し、昭和30年現在地に移す。

⑫眞端の橋の碑

旧字名まばたにある。むかし、八幡太郎義家が奥州出陣の際、大軍を率いて、ここを通過したといい伝えられている。

土地区画整理事業により橋が廃され、平成元年碑を建立。

⑬勘十堀

宝永年間、水戸藩が財政改革のため松並勘十郎を起用し、江戸との水路として、鹿島灘・涸沼川・巴川の連絡を図って運河を掘ったが失敗に帰した。大貫地内1km強の運河は数回にわたり埋め立てられ、現在、涸沼川に接するわずかな部分のみ残っている。

磯浜海防陣屋跡

外敵にそなえて文政8年(1825)日下ヶ塚権現台に遠見番所が設けられたが、天保5年(1834)烈公がこれを強化し海防陣屋とした。

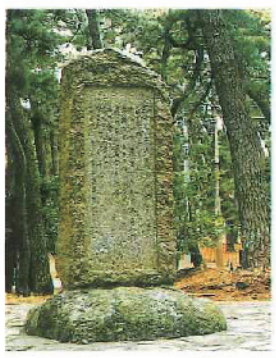
元治甲子の戦(1864)には激戦地となり、現在遺跡は日下ヶ塚の前方部を削った矢場跡のみとなった。

松川陣屋跡

水戸藩の支藩として元禄13年(1700)に守山藩が成立したが、同15年に当町松川にその陣屋が設置され、諸施設が建設された。

版籍奉還後一時松川県庁になったが、明治4年失火全焼し、現在はその跡になにもなく、耕地になっている。

※上記については、現在、陣屋跡の形状は残っていない。
又、民有地となっている。
ここでは、大洗町の歴史として紹介します。



⑭山村暮鳥の碑

山村暮鳥は群馬県群馬町に生まれ、晩年大洗町明神町に住んだ。大正13年41歳で当地で病死。

近代詩の方向をひらいた詩人として高く評価されている。

碑は、詩集「雲」の中から萩原朔太郎が「ある時」と題する詩を選し、小川芋銭の書で刻まれている。

昭和2年建立。

⑮子の日ヶ原の碑

烈公は、子の日ヶ原の美しい風景を賞して和歌を詠じ、天保12年(1841)自筆の碑を建てた。

和歌は、万葉仮名で書かれている。

「萬代遠満都仁契天気婦古曽八子日能半良耳引連幾爾化禮」

(万代を松に契りてけふこそは子の日の原にひかれきにけれ)

⑯三島中洲の詩碑

三島中洲は、明治の著名な漢学者で、二松学舎の創立者である。その作詩した有名な「磯浜望洋楼に登りて」が刻まれている。

昭和9年建立。

⑰磯節発祥の地の碑

磯節は当町の漁師達に古くから唄い継がれてきた民謡である。

「磯で名所は大洗さまよ松が見えますほのぼのと」と詩人西条八十の書で刻まれている。

昭和39年建立。

⑱ボードレールの碑

山村暮鳥終焉の地にちなんで碑は建てられた。碑には、暮鳥に深い影響を与えたと伝えられるフランスの詩人ボードレールのエトランジェの詩が原語で刻まれている。

昭和63年建立。

大洗町の伝説

⑲織姫塚伝説

涸沼川の下流に、深い淵がありました。深みに入った人は、百ひろワカメに巻かれ、九穴アワビに吸い付かれて殺されてしまうのだそうです。

江戸時代の初め頃ご存じ水戸黄門さまがやってきました。まだ、お若い頃だったそうです。「多くの尊い人の命を奪うとは不届きしごく、いで退治してくれよう」と、下帯一本になり、この深みに飛び込みました。百ひろワカメを切りほどき、九穴アワビをなげうって、なおも進むと遙か水底に不思議にも立派な家が見えてきました。中には大変美しい姫がいて、チャンカラコン、チャンカラコンと機織(はたおり)をしていました。ふとその手を止めて、「そなたは何者じゃ、ここになにしにきたのじゃ。」とたずねました。「余は水戸中納言光圀である。妖怪を退治にまいった。」と声高らかにいいました。すると姫は美しいほほにハラハラと涙を流し、「ここはあなたのような高貴な方が来るところではございません。本来なら命のないところなのですが、早々に立ち帰りなさい。」ときびしくいうのでした。光圀はやむなく、そのまま水面に帰ってきました。岸に案じていた家来たちはおお喜びでした。

光圀は、水底の姫を大変あわれんで、その川岸に立っている大きな岩石を織姫塚と名づけました。

⑳孫左ェ門の杉

昔々、大貫の船渡に孫左ェ門という若者が涸沼川の渡し守をして、母と暮らしていました。孫左ェ門は笛の名人で、いつも仕事が終わると舟を浮かべて吹いていました。

ある日、舟ばたに美しい官女が舟に乗ってあらわれ、笛の音を聞かせてほしいというので笛を吹いてやると、お礼に山のふもとの誰も知らない酒の泉を教えてくれました。孫左ェ門はそれ以来酒におぼれて、草むらで寝ていることが、よくあるようになりました。

そんなある日、磐城の国に働きにゆくといって出ていきました。母が心配していると、ある日ひょっこりと帰ってきて「寝ているときは部屋をあけないでくれ」といいました。母がのぞいてしまうと、なんと大蛇がいました。大蛇になった孫左ェ門がいうには「私は沼の内弁天の主である。母に姿を見られたからには、もう二度とあえない。最後の孝行に母の信仰している津島の天王さまに連れていってあげよう」と、母を背中に乗せ雲の中を飛んで、天王さまにお詣りさせて、その後沼の内に帰るといって、いなくなってしまいました。あの美しい官女は沼の内弁天だったのでしょう。母は泣く泣く、孫左ェ門をしのんで屋敷内に一本の杉を植え、そのもとに水神さまを祀りました。

それから幾星霜、歳月は流れて今日に至りました。孫左ェ門の杉は今では見上げる程の大木になりました。